１１.「豊臣恩顧の大名」が「忠義の武士」に変質

清正は、「豊臣恩顧の大名」の代表のように言われていますが、実はそれは秀吉が死去するまでのことで、その後は徳川家と強い姻戚関係を結び、第８代将軍徳川吉宗誕生後は、将軍家の外戚筋として、忠義の武士の代表に上り詰めています。この事実を直視せず、清正に「豊臣恩顧の大名」のレッテルを貼り、清正の行為や意図をこの言葉から導き出している例が多数見受けられますが、これは間違いです。

（1）秀吉に拾われ、育てられ、引き立てられた清正；「豊臣恩顧の大名」の誕生

清正は、１２歳のときに秀吉の小姓となり、秀吉の傍で育ちます。１４歳で元服すると秀吉に近侍しています。先陣を切って敵に攻め込むことはしておらず、若い時に武功を挙げたのは、２１歳のときの賤ヶ岳の戦いくらいです。賤ヶ岳の戦いの武功により与えられた官位も主計頭という通常勘定方を想起させる官位であり、秀吉は、清正を豊臣家の経営を担う者として育てようとしていたように思われます。同じ頃石田三成には、日向守という一国の太守を表す官位を授けていますから、この頃秀吉が考えていた 2 人の方向性は、後の方とは逆だったのかも知れません。

その後清正は、播磨、讃岐，和泉などで豊臣家蔵入地の代官を勤めています。そして１５８７年、国人一揆が起こった肥後に上使の１人として派遣され、肥後の状況を検分し、秀吉に報告しています。清正は、武功で肥後半国の領主に抜擢されたわけではなく、代官として経営経験があり、肥後に上使として赴任し肥後の実態をよく知っていたことから、肥後半石の領主に任命されたのです。このとき清正は、わずか２６歳でしたから、この任命は秀吉が主人でなければありえず、秀吉に深く恩を感じたのは当然です。ここでの清正は、紛れもなく「豊臣恩顧の大名」でした。

（2）小西・三成との対立；豊臣恩顧の揺らぎ

そして、１５９２年からの朝鮮出兵では、2 番隊の大将に任命され、初めて大規模な合戦で大将を勤めます。同じ隊には鍋島直茂もいましたが、合戦の実績から言えば直茂にはるかに及びませんでしたから、これは清正が秀吉子飼の大名であったからに他なりません。朝鮮では、上陸から約８カ月間は順調に進軍しましたが、その後明の参戦、朝鮮義兵の反撃、海戦での敗北などにより後退を重ね、食料や武器の供給もままならなくなり、商人上がりで眼鼻の利く小西行長や合戦に参加せず戦況を冷静に見ていた石田三成は、このまま続けても勝ち目はないと判断し、どういう形でもよいから和議を結び、朝鮮から撤退しようと考えます。その考えは、体の衰えを痛感し、徳川家康の強大化をひしひしと感じていた秀吉も同感でした。秀吉の本心を理解していた小西と三成は、秀吉が出した和議 7 条件を無視し、全面的に譲歩して明との和議をまとめようとします。それに対して清正は、秀吉の和議 7 条件を盾に、小西と三成が進める明との和議交渉を妨害します。小西と三成がやっと漕ぎつけた明の冊封使の日本渡航も、清正が朝鮮から撤退しない構えを見せたため、実現が危ぶまれる状況となります。そこで小西と三成は、清正の些細な失策を取り上げて、清正に帰国命令を

出すよう秀吉に要請します。それに対して、何としても和議を実現したい秀吉は、小西と三成の要請を受け入れ、慶長１年（１５９６年）４月、清正に帰国命令を出します。秀吉のこの決定は、清正の失策を問題にしたものではなく、明の冊封使の来日のためには、明が最も敵視する清正を帰国させるしかないと考えたためです。この帰国命令は、場合によっては切腹もあるという強い内容であったと言います。伏見に帰った清正は、朝鮮奉行の 1 人増田長盛の「三成にとりなしてもらえ」との忠告を拒否し、伏見で秀吉との面会を待つこと（蟄居）になります。この蟄居は、清正が良く知る肥後国人一揆を理由として佐々成正が大坂に呼ばれ尼崎で足止めの上切腹されられた事件や、前年に起こった秀次切腹・眷属皆殺し事件と重なり、清正は恐怖に襲われたことと思われます。こんな中、同年９月、伏見地震が発生し、大きな被害を受けた伏見城で秀吉らが退避しているところに清正が救助に駆けつけ、秀吉との面会を果たします。この際清正は、明との和議の実体を秀吉に語り、秀吉は、清正を帰国させた真意を語ったと思われます。その後、明の冊封使が大坂に到着し、秀吉は、家康以下大名総出で歓待します。しかし、その翌日の饗宴の席で明の冊封使が「朝鮮から完全に撤退しない限り、交易は行わない」と述べたことから、秀吉は激怒し、和議の破断を宣言します。秀吉は、小西や三成から明との和議の内容を聞き、大方承認していたと思われますが、明との和議と朝鮮との和議は別物と考えていたように思われます。即ち、明との和議では、全面譲歩もやむを得ないが、朝鮮との和議は別物であり、朝鮮との和議では、朝鮮領土の一部割譲は譲れないと考えていたように思われます。これにより明との和議は破断となりましたが、秀吉は、小西や三成を全く処罰しませんでした。これは、北の政所がとりなしたからとか言われていますが、実際は、今回の和議の内容に秀吉が深く関わっていたからではないでしょうか。

秀吉からの帰国命令以降、清正の秀吉に対する忠義は、揺らぎ始めたように思われます。この頃、秀次事件で連座して改易や切腹の危機に会った細川忠興や実際に転封された浅野幸長、大和郡山城主豊臣秀長の継嗣秀保（秀次弟）の不審な死やその後継に秀長前養子高吉を据えることが認められなかった藤堂高虎の心も秀吉から離れていました。秀吉と血縁関係が強い福島正則も、三成を重用する秀吉に不満を強めていたようです。

（3）秀吉死去；次の天下人は家康という見立てで脱「豊臣恩顧の大名」

慶長３年（１５９８）年８月の秀吉死去により、家康ら大老らは朝鮮撤退を決定し、慶長3年（１５９８年）１２月、清正は帰国します。その後慶長４年（１５９９年）３月、三成に恨みを持つ清正、黒田長政、細川忠興、浅野幸長ら７名の大名が申し合わせ、三成暗殺を企てます。歴史上七将襲撃事件と言われる事件です。三成は、伏見城内の自らの屋敷に逃げ込みます。ここで大老家康が仲介に乗り出し、三成の奉行職を解き佐和山城蟄居処分とすることで収拾します。このとき、徒党を組んだ七将は、次の天下人は豊臣秀頼はなく家康と言う共通認識があったと思われます。そうでないと、この後清正らが徳川家と結んだ姻戚関係や一致した行動は説明できません。即ちこの時点で、清正らは豊臣家を主家とする「豊臣恩顧の大名」の立場を捨てたと思われます。

（4）関ケ原の戦い；「豊臣恩顧の大名」から「徳川恩顧の大名」へ

そして、完全に「豊臣恩顧の大名」ではなくなったのは、関ケ原の戦いなどの論功行賞（１６０１年年初）の後です。この論功行賞では、東軍に味方した大名の多くが、秀吉時代に与えられた領土を上回る領土を与えられています。例えば、清正は２４万５千石から５４万石へ、黒田長政は１８万石から５２万石へ、細川忠興は１８万石から４０万石へ、福島正則は２２万石から４９万石へなどです。即ち、この時点で秀吉が与えた領土を上回る領土が家康から与えられたわけで、豊臣の御恩より徳川の御恩が大きくなったわけです。かつ豊臣は旧恩であり、徳川は現恩です。現恩より旧恩を大切にする大名はいません。従って、これらの大名については、これ以降「豊臣恩顧の大名」という形容は成り立たないということになります。関ケ原の戦いの際、東軍に就くことを表明しながら戦いには参加しなかった大名や戦いの途中で東軍に寝返った大名なども領土を安堵され、形式的には秀吉から与えられた領土ながら、徳川から新たな御恩を受けた形となっています。

現に、１６１４年・１６１５年の大阪の陣で豊臣方に加勢したのは、関ケ原の戦いで西軍に参加し、取り潰しになった旧大名やその家臣ばかりで、関ケ原の戦い後に家康から所領を与えられ、また安堵された大名は含まれてません。豊臣家に御恩を感じ一生忠義を尽くすという意味での「豊臣恩顧の大名」は、関ケ原の戦い後の論功行賞でほぼ絶滅したと言ってよいと思います。

（5）家康に警戒された「豊臣恩顧の大名」清正

関ケ原の戦い後も家康は、清正を「豊臣恩顧の大名」として警戒していたように思われます。

１６００年家康が上杉景勝討伐に自ら出陣することに対して、清正は、(a) 大将は軽々しく本拠の大坂城を離れるべきではない (b) 家康も年であり長征は体に悪い (c) 上杉討伐は自分や福島正則、細川忠興らに任せればよい、と言い、家康の出陣を諫めたという話が徳川実記に紹介されています。家康は、この諫言を聞き入れず、清正には「京において禁闕を守らせようと思っていた」が「九州に帰り九州での争乱に備えるよう」命じます。これに対し清正は、「諸将とともに先鋒を務めさせて欲しい」とお願しますが、家康の許しは出なかったとあります。この時点では、関ケ原の戦いは予想できなかったとは言え、七将襲撃事件の七将のうち、上杉討伐に同行を許されなかったのは清正だけであり、家康に清正を同行したくない何かがあったと思われます。その１つは、前年３月に起り、この年３月に収束した島津藩の内乱（庄内の乱）において、家康が大老として内乱の仲裁に動いている中で、清正が内乱を起こした側（伊集院忠真）を密かに支援していたことが発覚し、家康を怒らせたことと言われています。また、上杉討伐に家康が出陣することに対して、豊臣政権の奉行の前田玄以、増田長盛、長束正家も家康に出陣を思いとどまるよう諫言したことが徳川実記に紹介されており、「これは家康の出陣を遅らせ、上杉方が体制を整える時間稼ぎのためだった」と述べられていることから、清正は前田らの奉行と共謀しているのではないかと疑われていたのかも知れません。この時点で家康は、完全に清正を信頼していなかったように思われ

ます。

このことは、徳川実記に紹介されている関ケ原後に伏見城で家康が清正について語ったという話からも分かります。家康が「現在天下で加藤肥後守清正に及ぶものはあるまい」と言ったところ、謀臣として名高い本多正信が「信玄や謙信など名だたる名将を見てこられた殿がなぜ清正ごときを褒めるのか」と言うと、「清正のことはよくわかっている。今は西国にいるから安心だが、あれには１つ欠点がある」「それは物事に対して不安定な心があることだ。もう少し心が落ち着けば並ぶ者がいない人物だ」と言ったとあります。その場には京の商人らも同席していたということですので、これらの者から清正の耳に届くことを想定した家康から清正へのメッセージだったと思われます。家康が言う「不安定な心」とは、(a) 朝鮮での失策を理由として朝鮮から帰国させられた際、秀吉への影響力が大きかった三成との面会を拒否し、蟄居状態になったこと（家康や前田利家が擁護に動いたと言われています）(b) 前田利家と家康が対立し、和解のため利家が家康邸を訪問した際、清正は利家の警護についたこと（藤堂高虎や黒田長政らは、家康の屋敷を警護し、親家康の立場を鮮明にしていました）(c) 島津藩の庄内の乱において、家康が仲裁しているにも関わらず反乱側を支援していたこと（d）奉行の三成を襲撃すれば、普通なら襲撃した方が切腹のところ、清正が中心となって七将襲撃事件を引き起こしたこと、などを指してのことと考えられます。清正のこれらの行動は、我慢の人家康にとっては、感情に任せた無謀な行動、先行きを考えない無思慮な行動＝「不安定な心」と映ったのだと思われます。この家康の話は、清正に伝わり、清正はそれ以後物事に慎重に取り組むようになったと言います。この家康の話について本多正信は、息子の正純に対し、「この話は、家康様が清正を褒めたのではなく、清正に対する警戒心を表したものだ」と述べています。関ケ原の戦いの論功行賞の結果、中国・四国・九州には、秀吉に取り立てられた大名が集められました。とりわけ九州には、清正以下黒田（筑前）、細川（豊前）、鍋島（肥前）、田中（筑後）、島津（薩摩）など武略に長けた大身大名が集まりました。清正が七将襲撃事件のようにこれらの大名を糾合して、徳川幕府に反旗を翻せば、たちまち東西分裂の危機です。家康にとって清正は、反徳川の核となりうる人物として警戒を要する存在だったと思われます。

(6)「豊臣恩顧の大名」清正への警戒感が和らぐ

家康が江戸に幕府を開くと、清正は、いち早く江戸屋敷を作り、江戸に参府（参勤）するようになりますが、暫くして本多正信が清正に３か条にわたり問い質した話が徳川実話に残されています。その３か条というのは、(a)貴殿が多数の兵を引き連れて江戸へ来るのは、不穏であり減らされよ（b）平和な時代に貴殿が顔に髭を伸ばしている姿は、好ましくないので剃られよ（c）徳川の世になって他の大名は大坂城には伺候していないのに貴殿が行き帰り伺候されるのは、徳川より豊臣を重視する気持ちの表れともとれるので止められよ、という内容です。

江戸幕府の時代になると平和になって、ほとんどの大名は、それまで生やしていた髭を剃りさっぱりした容姿で、供の者はなるべく少ない人数で、江戸へ参勤するようになっていま

したが、清正だけは、多くの供の者（兵）を連れ、顔には髭を生やし、大型の帝釈栗毛の馬に乗って参勤していたようです。この戦国武将の行軍を思わせる清正の行列は、清正の朝鮮での武勇や江戸屋敷の豪壮さと相俟って、江戸の庶民には受けたようです（この清正の江戸入りの様子を歌った「江戸のもがりにさわりはすとも、さけて通しゃれ帝釈栗毛」という歌が流行ったと言います）が、徳川幕府にとっては好ましくなかったようです。

この正信の問い質しに対して、清正は、(a) 領国が江戸から遠く、江戸で何かあっても急に兵を呼べず力になれないから多数引き連れてくるのであり、減らせない（b）確かに平和な世の中になったが、いつ何が起こるとも知れず、髭は兜をしっかり付けるためであり、剃れない（c）徳川家には肥後１国を賜った御恩があるが、豊臣家には若くして取り立てて頂いた御恩があり、これを忘れ去るのは武士の心得でないと考えるので、伺候は続けたい、と言い、どれも聞き入れなかったと言います。この頃清正と正信は、親しくなっていたと言われており、だから成立したやり取りと思われます。正信がこれを家康に報告したところ、家康は笑っていたとあります。この話には、清正と家康との信頼感の深まりが伺え、この頃からは、家康の「清正＝豊臣恩顧の大名＝警戒を要する人物」という認識が変わってきていると思われます。

(7)「豊臣恩顧の大名」から「徳川姻戚大名」へ

慶長４年（１５９９年）３月の七将襲撃事件後、清正は、家康の養女（家康の従妹。家康の生母於大の方の弟で刈谷藩主水野重忠の娘かな姫）を継室に迎えます。ここから清正は、家康に与して行きます。１６００年の関ケ原の戦いでは、清正は東軍に属し、九州で小西行長の宇土城、立花宗茂の柳川城を開城させ、その恩賞として肥後１国５４万石への加増を受けます。慶長８年（１６０３年）２月、家康は朝廷から征夷大将軍に任じられ、江戸幕府を開きます。その年の１０月、清正は、浅野幸長とともに江戸へ参上します。豊臣家と縁が深い２人がこんなに早く江戸へ参上したことは、家康を喜ばせたようで、徳川実記には、「その頃家康十男頼宣（当時２歳）と清正次女八十姫（当時３歳）の婚約が決まった」とあります。しかし清正は、この話を家康のリップサービスだと思い、１６０９年の正式の婚約まで本気にしていなかったように思われます。

その後１６０６年、清正は、長女あま姫を徳川四天王の１人館林藩主榊原康政の嫡男康勝に嫁がせます。清正にとって、家康軍の中で先鋒を務めることが多く武略に優れた康政は、憧れで目標とする武将だったようで、文禄の役の際には、康政の金桔梗笠馬印を借り受けています。従ってこの婚姻は、清正・康政双方の意向を家康が承認して成立したと思われます。これで、徳川家ばかりでなく、徳川譜代の有力大名とも姻戚関係ができ、清正は、確実に徳川幕府の有力大名の地位を占めていきます。

そして、止めが慶長１４年（１６０９年）１０月の頼宜と八十姫の正式の婚約です。頼宜は当時８歳で、水戸藩主ながら駿府の家康の元で育てられ、家康の寵愛を受けていました。この婚約の狙いは、家康が清正を評価していたことはもちろんですが、家康も６６歳になり先行き長くないことから、最大の懸案である豊臣家臣従の説得を、豊臣家との関係も良い清

正に期待してのことと思われます。そして、それが失敗した場合には、豊臣家を亡ぼすことを決意し、その場合この婚約およびその後の結婚が鎹となって、清正が豊臣側に就かないことを確実にすることにあったと思われます。この年１２月家康は、駿府藩を５０万石で立藩し、頼宜を藩主としていますが、これは、八十姫との婚約に伴い頼宜の藩主としての格を引上げたものと思われます。翌年の慶長１５年（１６１０年）９月には、頼宜の傅役三浦為永（頼宜の生母お万の方の兄）が結納使として熊本城へ行き、婚約を整えています。
慶長１６年（１６１１年）３月、清正は、家康の期待に応え、秀頼と家康の二条城会見を実現します。これで家康の清正に対する期待は、ますます大きくなったと思われます。しかし清正は、その約３か月後の６月２４日帰らぬ人となります。

（8）徳川吉宗登場で忠義の武士として蘇った清正

清正死去により、徳川幕府にとって、加藤家の利用価値はなくなりましたが、清正次女八十姫と家康十男頼宜の婚姻や肥後藩第２代藩主となった清正三男忠廣と家康の三女振姫（会津藩主蒲生秀行室）の娘琴姫との婚姻により、徳川将軍家と加藤家の姻戚関係はますます強固なものとなります。加藤家は、旧豊臣恩顧の大名の中でも有力な徳川将軍家の姻戚大名となっています。従って、１６３２年の加藤家改易は、豊臣恩顧の大名家潰しで行われたものではありません。

加藤家改易後は、清正の存在は忘れられていった（消されていった）と思われます。徳川幕府内で清正の存在が再浮上したのは、清正死後１００年以上たった１７１６年に徳川吉宗が第８代将軍に就任してからです。吉宗は、第５代紀州藩主から将軍に就任しており、祖父は初代紀州藩主徳川頼宜、祖母は清正の次女八十姫（法名瑤林院）でしたので、吉宗にとり清正は、外曾祖父となります。瑤林院には子供がおらず、吉宗の父２代目藩主光貞は、頼宜の側室が生んだ子でしたから、吉宗に清正の血は流れていませんが、吉宗は、将軍就任後、肥後藩を通して清正の記録や遺品を取り寄せ、閲読・閲覧したと言います。

ではなぜ突然吉宗は、清正について調べる気になったのでしょうか？それは、吉宗の将軍就任時に、清正血筋（清正長女あま姫の血筋）の阿部正喬（まさたか）が幕府老中を務めていたことが関係していると思われます。将軍就任後正喬から「私は、将軍外曾祖父の清正公の血を引くものです」という話があり、清正に対する興味が湧いてきたのではないでしょうか。１６３２年の加藤家改易により、歴史の表面から消された清正の名は、吉宗が将軍に就任し直接調査したことにより、将軍外曾祖父として蘇ります。吉宗以降の将軍は、第１５代の徳川慶喜を除き吉宗血筋の者が就任していることから、吉宗の外曾祖父である清正は、幕府内では尊敬せざるを得ない地位に上がって行ったと思われます。

尚、吉宗が清正への関心を呼び起こす原因を作ったと思われる阿部正喬は、吉宗が将軍に就任した翌年には辞任しています。まだ４５歳でしたし、その後忍藩主は続けていますので、年齢や健康の問題で辞めたわけではないようです。幕府内では、老中職は譜代大名から就任する、親藩や将軍血筋からは就任しない慣習となっており、正喬は、形式的には吉宗の血筋に連なることになることから自ら身を引いたと思われます。

(9)「豊臣恩顧の大名」が「忠義の武士」へ変貌

熊本城の本丸御殿の昭君之間を、「豊臣恩顧の大名であった清正が、大坂城を追われた豊臣秀頼を迎え、徳川幕府と戦うために作った部屋」と言う説は、江戸時代からの庶民の伝承を明治以降書き留めた文書が根拠となっているようですが、十九世紀前半に書かれた広瀬蒙斎の紀行文「有方録」にも、「加藤清正は、熊本城に秀頼を迎えて江戸幕府と戦う計画だった」とあります。広瀬蒙斎は、陸奥白河藩主で幕府老中として寛政の改革を主導した松平定信に重用された儒学者で、白河藩の藩校立教館の学頭や教授を務めた人物です。松平定信は、吉宗の孫であり、定信について書かれた「明君白川夜話」にも定信が清正を賞賛した話が書かれています。蒙斎は、清正の時代を生きておらず、清正が昭君之間を作った意図など知る由もなかったはずです。この蒙斎の見解は、蒙斎が肥後を旅したときに熊本城下で聞いた話を書いたもので、それ以上の根拠はないと思われます。蒙斎の狙いは、江戸幕府、特に定信が強く推し進めた儒学教育において、武士に最も大切とされる主君への忠義を体現した人物として、定信が尊敬する清正を位置付けることでした。清正は、徳川幕府が成立した後も豊臣家への忠義を忘れず、命を賭けて旧主君の子秀頼を守ろうとした（儒学に言う六尺の孤）と設定し、清正を徳川幕府が求める忠義の武士像に祭り上げようとしたと考えられます。

ここでは、徳川幕府成立当初の「清正＝豊臣恩顧の大名＝警戒を要する人物」という認識が、「清正＝豊臣恩顧の大名＝徳川幕府が求める忠義の武士の代表」に変貌しています。
本当に、豊臣恩顧の大名の中から最後まで豊臣家に忠義を尽くした大名を上げるなら、豊臣家の治世の継続のために関ケ原の戦いに臨み死んだ石田三成こそふさわしいと思われます。しかしそれでは、徳川統治体制強化のためという目的にそぐわないため、豊臣恩顧の大名でありながら、将軍家外戚となり、すでに本人および加藤家も存在せず、徳川幕府内の序列を乱すことがない清正を、徳川幕府が求める忠義の武士像に仕立て上げたものと思われます。

その後明治以降においては、主君に代えて天皇への忠義が求められ、清正は忠義を尽くした人の代表として教科書などでも取り上げられ、神として祀る神社まで現れることとなりました。